

【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

(領域ごと)

①言葉の特徴や使い方に関する事項	概ね良好な結果であった
②情報の扱い方に関する事項	概ね良好な結果であった
③我が国の言語文化に関する事項	概ね良好な結果であった
④話すこと・聞くこと	概ね良好な結果であった
③書くこと	概ね良好な結果であった
④読むこと	良好な結果であった

(問題形式)

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	概ね良好な結果であった
③記述式	概ね良好な結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

- ・もともと正答率の高かった設問は行書に関する問題であった。一方で、正答率の低かった設問は、情報を引用し、自身の考えを伝える問題であった。
- ・無解答率が0%であったのは選択式や短答式の問題で、漢字の問題の無回答率が高い傾向があった。

分析

全国や大阪府に比べて正答率が大きく下回った問題は「様々な情報から、適切な答えを導く問題」であった。日ごろから読み取り問題や言語に関する問題などには取り組めているが、資料を読み取る問題を解くという経験が少なかったことが影響していると考えられ、様々なタイプの問題を演習することが国語力の定着に効果的であることを示している。

書写に関する問題の正答率が高いことが分かった。これは1年次から書写に取り組んできた成果が表れていると考えられる。ただ書くだけでなく、点画の流れを意識して授業に取り組んでいることも分かった。

一方で漢字を書く問題の無解答率が高い。スマホやタブレットの流通で、生活の中で文字を「書く」こと自体が減っているのが、単純に漢字を反復練習するだけでなく、漢字の意味や部首も関連させて覚えることができるような授業作りが課題である。

〇●数学●〇

(領域ごと)

- | | |
|---------|-------------|
| ①数と式 | 概ね良好な結果であった |
| ②図形 | 概ね良好な結果であった |
| ③関数 | 良好な結果であった |
| ④データの活用 | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③記述式 | 良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

- ・もっとも正答率の高かった設問は、2元1次方程式(連立方程式)の解を求める問題であった。一方正答率の低かった設問は、図形の性質の説明であった。
- ・無解答率が0%であったのは選択式の問題で、記述式の問題の無解答率は高い傾向があった。

分析

全国や大阪府に比べて正答率が大きく下回った問題は1学年で学習した素因数分解の問題であった。一方、正答率が高かった問題は、連立方程式であった。素因数分解については、復習の機会がなかったこと、連立方程式については、毎時間の復習の時間に、問題を解く機会が多かったことが影響していると考えられ、折に触れ復習することが学力の定着に効果的であることを示している。

記述式問題は、正答率が高いというわけではないが、全国平均と比べると良好な結果であり、プリント学習で記述式問題を入れるようにしていることと、授業内で、学び合いが定着していることが成果につながったと考えられる。

一方で、無解答率が全体を通じて高い。苦手意識から、難しいと感じる問題に取り組む意欲を持ちにくい生徒が多いと考えられるため、問題と向き合い、自分なりに考えようとする事ができる授業作りや支援に取り組んでいきたい。

理科

(領域ごと)

- | | |
|--------|-------------|
| ①エネルギー | 概ね良好な結果であった |
| ②粒子 | 概ね良好な結果であった |
| ③生命 | 概ね良好な結果であった |
| ④地球 | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

・もっとも正答率の高かった設問は、「条件に合わせて実験操作の組み合わせを選択する問題」であった。一方、もっとも正答率の低かった設問は、「重力とつりあう力について説明する問題」であった。
・もっとも無解答率の高かった設問は、「考察の妥当性を高める方法について説明する問題」であった。一方で、もっとも無解答率の低かった設問は、「日常生活の中で起こりうる現象を選択する問題」であった。

分析

各領域とも全国平均と大きな差はなかった。最も正答率が高かったのは、タッチパネルの反応についての問題で、大阪府の正答率よりも大きく上回っていた。また、生物の外部形態を基に科学的に探求する問題および水の状態変化を科学的に探究する問題では、各小問とも全国平均を上回っていた。

一方、水素の利用を科学的に探究する問題、ばねを科学的に探究する問題および地層の傾きを考察する問題は全国平均を下回っていた。このことから、日常的に身近に感じられる事象と非日常的な事象とを関連させた知識の習得に差が出ているように思われる。そのため、実験による体験型の授業の構築をしていくことが望まれる。実験を増やすことにより授業時間数の確保が課題となるが、実験のための準備や振り返りを視覚教材と組み合わせながら行うことで、進度を保障していくことができるよう計画的に取り組んでいく。

短答式の解答に関して、全国平均より低い結果になっているが、短答式の問題数自体が1問のみの設定なので、今後の取り組みを検証する必要があると思われる。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

昨年度と比較して平均正答率は、国語、数学ともに上昇している。

しかし、すべての教科において、無解答率が高くなっており、解答に自信がない時には、取り組むことができない傾向が見られる。

今後は授業だけでなく、行事等の取り組みも含めて生徒の自己肯定感、自己有用感を育む取り組みもあわせて進めていく必要がある。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層 についての分析

(昨年度比)

国語:高位層、エンパワー層ともに増加している。

数学:高位層、エンパワー層ともに増加している。

2教科等も中間層が減少しており、2極化が進んでいることが課題となっている。

今後はエンパワー層の学習に対する主体性を高められる授業づくり、ペアワークや班活動を通じた基礎基本の定着をめざす。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

①校内授業研修の実施

- ・全体の研究授業を年に1回実施。
- ・小中合同での研究授業を年に1回実施。
- ・各学年での研究授業を実施。

②生徒が主体的に学ぶ授業

- ・ペア学習や班学習など、学び合いの場面をつくりお互いに高め合う。
- ・各学年「やる気スイッチ運動」の取り組みにより、授業にむけての意識を高める。
→「授業の準備を休み時間の前にする」「チャイム着席の徹底」など、取り組む内容は各学年で決定し、学級委員や班長を中心に声掛けを行う。

③家庭学習の充実

- ・自主学習ノートを活用し、家庭で学習する習慣を定着させる。
- ・必要に応じて保護者と面談し、支援する。

④学習会の実施

- ・テスト前の放課後に学習会を実施し、エンパワー層に基礎基本の定着を図る。
- ・長期休暇中に各学年で学習会を実施し、休業中の課題提出を支援するとともに基礎基本の定着を図る。
- ・提出物点検（定期テスト・長期休暇）

⑤朝読書の実施

- ・年間をとおして朝読書に取り組み、落ち着いた雰囲気の中で1時間目の授業に臨む姿勢を身につける。

⑥数学科・英語科での少人数分割授業（習熟度別指導）

- ・習熟度別指導により、個に応じた指導を行う。

⑦主体的な学びの視点を意識した授業づくり（ユニバーサルデザインを意識した授業づくりの推進）

→目標や授業の流れの掲示、板書と授業プリントが一致する 指示の明確化 など

⑧ICTを活用した授業づくり

- ・電子黒板と一人一台のタブレットPCを活用し、視覚的に理解したり、他者の考えに触れたりする機会を増やす。
- ・欠席者に対してオンライン授業等での支援を行う。